
入門 病院における心理士の仕事

日常臨床に生かす気づきと工夫

白井聖子著

金剛出版, 四六判 208 頁, 2,860 円, 2025 年 9 月刊

(名古屋大学医学部附属病院精神科) **木村宏之**

本書は、素敵な入門書である。著者白井聖子先生にとって2冊目の単著だが、実のところ、1冊目のご著書が木村敏先生の精神病理学に基づく論考だったため、入門書とはいえ、難解で十分に理解できないかもしれないと不安だった。本書を手にとったところ、松木邦裕先生の推薦文を皮切りに、そんな不安は良い意味ですぐに裏切られた。長年にわたる白井先生の精神科専門病院におけるまっすぐな臨床実践が、本書の全体にちりばめられ、具体的な臨床場面とともに明快に語られる。

第一章「面接を始める前に」では、白衣の下に着る服装や化粧に始まり、外来や病棟の面接室の設定に至るまでについて、そして第二章「心理検査」でも、子どもから高齢者まで心理検査を受ける患者について、いずれにも細やかな心配りがある。第三章「面接の開始をめぐるあれこれ」と第四章の「面接過程で生じてくること」では、心理療法すべての過程において、白井先生が面接内外で起こってくる事象をいかに丁寧に扱っているかよくわかる。例えば、第四章の20代の被虐待体験のある自傷が激しい女性患者の治療は印象的だった。精神科医による全体のマネージメントに基づき、心理療法は母親との関係について「行動化ではなく言葉で表現していくことを目標……内省のための患者の自我を育てるような役目」として行われ、並行して訪問看護の看護師は「身体的ケアも含めた母性的な関わり……傷の手当てや時には頭をなでたり、手を握ったりする」ことを担い、精神保健福祉士（PSW）は「現実的な対応の相談に乗り手助け……根気よく励ます」ことを担っている。白井先生、看護師、PSWの三人は、毎回、繰り返される自傷行為について相談する。それぞれが感じる哀しみや怒りに翻弄されながら、専門家の主体性を維持しつつ率直に話し合えるようになり、患者は安定していった。こういった患者の治

療では、医療者間に対立が生じやすく率直に話し合うことは難しいと思うが、白井先生は柔軟に周囲と協力をして、患者の回復につなげている。病院にとって初めての非常勤心理士として入職した先生が、こうした主体的で協働的な臨床実践を展開できるまでに少なくない苦労があったことは容易に想像できる。しかし、第五章「もう一度、病院における心理臨床を考える」で病院の心理臨床の魅力が存分に語られるように、本書の行間からは、そういった苦労を卑屈な体験に感じさせない明るさがある。

さて、今回、書評依頼があった理由の一つに、木村が白井先生と同じ名古屋大学精神医学教室の研修制度を終了したからかもしれないが、本書に出会うまで、直接、先生のことを存じ上げなかった。先日と同門会で、当時の白井先生について少し伺ったところ、近くにいた何人もの先生が自然に声を掛け合って集まってきて「柔らかい先生だったなあ」「本を出すなんて思わなかった」などと研修時代の話に花が咲いた。今回の著書にあるような、白井先生の周りに人が集まり、建設的な対話が生まれる臨床実践の萌芽は、かつての名古屋の地でも芽吹いていたようである。

本書は、白井先生のような心理臨床ができるようになれば良いなと思える本であり、読者にもそんな臨床家になれるヒントがたくさんちりばめられている。これから医療機関で働こうと思っている初学の臨床家にも、既に病院臨床を実践する臨床家にも、是非、手に取っていただきたい1冊である。
